

〔東雅天文〕雷イカヅチ イカヅチとは畏るべきの神といふが如し、上古の語に、イヅといひ、イカシといひしは、嚴畏の義也、されば舊事紀には、嚴の字、讀てイヅといひ、日本紀には亦讀てイカシといふ、○中略 雷の字、讀てツチといふ、山雷をして天香山之五百箇眞賢木を掘じといひ、火神の名を嚴香來雷とし、別の名を嚴山雷とすと云ふが如きこれ也、○中略 嚴雷といひし事、霹靂の神をのみいひしとも見えず、また山木水土の如き其神をいひて、イカヅチとせしのみにもあらず、雄略紀に、天皇三諸岳の大蛇を見畏給ひ、名を賜りて雷となされしと見えれば、此時までも畏るべき者を、崇め尙びて雷といひし事、猶これ太古の俗の如くなりしとぞ見えたる、イカヅチ又はナルカミともいひ、ナルカミは鳴神なり、雷霆の霹靂をカントキなどいふも、皆是神をもて稱する事、ツチといふの義に相同じ、カントキとは、疾雷といふが如し、或説にイカヅチとは、怒の義なり、カとは雷なり、人物を撃つ義なりといへり、義合へりとも聞えず、されどイカルといふも、イカとは即嚴之義なり、ルといひりといふが如きは語助也、是又畏るべきの義によれり、

〔古事記傳六〕雷は万葉三十二に伊加土藥師寺佛足石の御歌に伊加豆知、これら此名の正しく見えたるなり、名意は嚴なり、豆は例の之に通ふ助辭、知は美稱なり、

〔萬葉集十九〕太政大臣藤原家之縣犬養命婦奉天皇歌一首

天雲乎富呂爾布美安多之鳴神毛、今日爾益而可之古家米也母、

右一首傳誦掾久米朝臣廣繩也、

悲傷死妻歌一首并短歌 作主未詳

天地之神者無禮也、愛吾妻離流光神、鳴波多、嬖孀携手共將有等念之、爾情違奴、略

〔古今和歌集十四〕題之らす

天の原ふみと、ろかしたる神も思ふ中をばさくる物かは

よみ人之らす

〔拾遺和歌集十九〕かみいたくなり侍けるあした、宣陽殿の女御のもとにつかはしける、